WWW.EDOGAWA-U.AC.JP

江戸川大学 学生新聞

THE EDOGAWA TIMES

2013年
4月24日
水曜日
VOL.2 #02

取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学広報センター

江戸大の卒論発表会は普通じゃない
「喋って」「演奏して」「着替える」

2013年2月14日、江戸川大学で優秀卒業論文発表会が行われた。どれも聞きごたえのある内容ばかりで、卒論を書く学生の参考になる。さらに、発表方法が変わっているのが江戸大の卒論だ。（文：片田正記）

2月14日、江戸川大学で優秀卒業論文発表会が行われた。優秀卒業論文発表会は、各学科のゼミナールから優秀な論文が選出され、学生が概要をプレゼンテーションするというもの。学科ごとに卒論の内容に特徴があり、江戸川大学の研究・教育領域の多様性があらわれていた。

人間心理学科では、多くの論文が大学生の生活を心理学的に分析していた。ライフデザイン学科（現：現代社会学科）は、国立公園のアボリジニとの共同管理や、駄菓子屋が担う社会的役割といった、人々の生活に即した題材が目をひく。経営社会学科では、日本の観光ビジネス、観客動員数から見たスポーツクラブ経営など、ビジネス的な視点が感じられた。マス・コミュニケーション学科では、日々の事件をマスコミの視点から論じている。広島東洋カープの広報戦略、メディアスクラムのメカニズム、サブカルチャーの聖地巡礼が地域広報として有効なのか、といったものが挙げられた。情報文化学科では、ソフトウェアやOSの変遷、ゲーミフィケーションといった情報テクノロジーが話題となっていた。さらに、情報文化学科は外国語に力を入れていることから、海外文学作品を題材としたものもあった。

市村佑一江戸川大学学長は、「各学科の卒論を読んでみて、それぞれの特色がよくでていたと思います。優秀卒業論文発表会にもっといろんな人に来てほしい。江戸川大学では、こういう研究をやっているのだということがわかります」と語っていた。

これから卒論を書く学生はもちろんのこと、江戸川大学ではどんな研究をしているのか興味のある方には、ぜひ来てもらいたいとのことだ。

（上）情報文化学科の発表（右下）マスコミュニケーション学科での発表。実際に演奏をして発表している（中下）マスコミュニケーション学科の発表。発表途中で着替える場面も。（撮影：君島孝規）

「卒業論文は卒業のためだけの物ではない」。そう語った、マス・コミュニケーション学科の隈本ゼミから選ばれた4年の小川原咲さんにお話を聞いた。

「薬害被害者の長期にわたる検証活動で明らかになったわが国のワクチン行政の問題点」という卒論だ。高い確率で副作用があるとされ、問題となっていたMMRワクチン。それを接種して自身の子供が被害に遭われた栗原敦さんに実際に取材をし、そこから日本のワクチン行政の問題点をあぶり出すという内容。マスコミ学科の数ある論文から選ばれた中でも、かなり〝硬派〟な題材だ。

「働く上でも勉強になります」
江戸川大学OG小川原咲さん

小河原さんが、この題材で書こうと決めたのは10月の始めで、卒業論文の締め切りは12月20日。執筆期間は2ヶ月弱しか残されていなかった。その短い期間で完成させた原動力はなんだったのか。そこには、熱い想いがあった。「栗原さんからお話を伺っていくうちに、大きな社会問題であるのに、これといった報道がされていないことを知り、不思議でした。事実を知っていくうちに、特ダネというのは、こういう地道な取材から出来上がって行くものなんだな、と感じました」。

小川原さんは論文を書き上げる前には産経新聞社に内定が決まっていた。卒業論文は卒業後の仕事の準備に役立ったという。「取材の仕方やお話の聞き方など、記者として働く上でも勉強になりました」。

小川原咲さん（現在は産経新聞社記者）

学生記者募集！

学生記者クラブは、学内外のイベントや、部活動、サークル活動などを取材します。
記事は「江戸川大学学生新聞」として発行するだけでなく、ウェブにもアップして世界に向けて発信していくプロジェクトです。
「Journalism」とは「発見や感動を相手に伝えること」。あなたもジャーナリストになろう！

N棟1階の受付にお気軽に声をかけてください。連絡先：TEL(04-7152-9908)E-mail(kouhou@edogawa-u.ac.jp) 企画総務課